

「すみません、やっぱりダメでした」

そう言つて、ドンとヴォルフを突き飛ばす。

「なにを——」

声を上げた瞬間、ジブリルの背後から野太い鎖が這い出していた。

鍵穴から噴き出すそれは光でできていた。しかし先ほどの莖色のそれとは異なり、まがまが禍々しい色の光だ。

後ろから降りかかる鎖の束に、銀髪の少女はなす術もなく呑み込まれてしまう。

「ジブリル！」

「あと、お願いしますね」

こんなときだというのに、ジブリルは笑っていた。

いつもの人を小馬鹿にした笑みではなく、柔らかい笑顔だった。

それを最後に、少女の華奢な身体はひとたまりもなく鳥籠の中へと引きずり込まれる。

それでも、鎖の中から細い手が覗いていた。

「掴つかまれジブリル！」

ヴォルフはその手を掴む。

——届いた！

そのまま鎖の中から少女の身体を引きずり出す。ぐったりとして倒れかかるジブリルを抱き止め

ると、直後に鳥籠の扉が閉まった。

ホッと息を漏らす。

「焦らせるな……?」

しかし、少女から返事はなかった。

頭から血の気が引く。

呼吸はしているし、心臓の鼓動も伝わってくる。なのに、彼女がここにいないことがわかってしまった。

恐る恐る顔を上げる。

無人になったはずの鳥籠に、人影があった。

天使の姿をした少女。

ただ、その顔はユツタではなくジブリルのものになっていた。身体を引き寄せせても、魂は引きずり出されてしまったのだ。

——助け、られなかった……。

抜け殻になった少女の身体を抱いたまま、ヴォルフは柵に掴みかかる。

「クソッ、なんで逃げなかった!」

ジブリルはトラップに気づいていた。自分ひとりなら逃げられたはずなのに、ヴォルフを庇^{かば}ったのだ。

——いや、ものに触れられないジブリルが残ってもなにもできない。

ならばヴォルフが残らなければ仕方がないのだが、普通は自分が逃げるものだろう。

ジブリルは自分の唇に人差し指を当てる。

「……今度は、お前の声を聴いたら操られるってことか？」

ジブリルは小さく頷く。

それから、地下室の扉を指で示す。

ジブリルが閉じ込められてしまった以上、先ほどと同じ手はもう使えない。彼女を助けるためには揺籃の鍵を手に入れるしかなかった。

ヴォルフはジブリルの身体を静かに横たわらせる。

それから立ち上がると刀を腰の鞘に収めた。

「……鍵を探していく。少し、そこで待ってろ」

ジブリルは心配していないというように、いつも通りの笑みを浮かべて手を振った。

——手、震えてるぞ。

平然としているようで、ジブリルの手は震えていたのだ。それに気づかぬふりをして、ヴォルフは階段を上っていく。腰に収めた刀は、ヴォルフの憤りにいきどお応えるように鳴動していた。

——なんで、よりによってそんな顔で笑うんだ。

それはいまの作り笑いのことではない。

ヴォルフを突き飛ばしたときの微笑だ。

——あんな顔が最後に見た表情なんてごめんだ。

あの少女はいつものように、憎たらしく笑っていればいいのだ。
あんな人を氣遣うような笑顔など見たくはなかった。



ガランとやかましい音を響かせ、鋼鉄の扉が庭まで吹き飛んだ。

「は……？」

地下室を抜け出すと、そこには啞然とするベルリングが立っていた。

ロイの姿はない。

周囲には護衛のように数人の使用人がいる。数が減ったのは負傷者を下がらせたのか。やはり彼らには表情はなく、その瞳もガラス玉のようで意志というものが感じられなかった。

——こいつらも、操られている口か。

ひとりでのこのこ出てきたヴォルフを前に、全員が呆然としたように立ち尽くしている。

まあ、無理もないだろう。

分厚い鉄の扉は完全にひしゃげ、その中央には足跡のような凹^{くぼ}みが撃ち込まれている。

ヴォルフはこれを蹴破ったのだ。いったいどんな力で蹴りつければこんなことになるのか、腰の刀が喰るように鳴動していた。

なにごともしなかったように、ヴォルフは階段を上って地上に出る。

「なっ、なっ……」

声にならない悲鳴を上げるベルリングを冷たく見据えた。

「悪いが事情が変わった。鳥籠の鍵をよこせ。よこさなくても奪い取らせてもらおう」

「こ、殺せ！」

ベルリングの命令に、使用人たちがいつせいに飛びかかってくる。

ヴォルフは抵抗しなかった。

その腕に、足に、身体にと掴みかかってくる。人形のような使用人の力は尋常ではなく、掴まれた皮膚がどす黒い赤に変色した。

しかしヴォルフは平然としてこう告げた。

「あいにく、俺は壊す方が専門なんだ」

そう言って首を掴む使用人の腕を掴み返すと、そのまま無造作に引き剥がしてしまふ。

痛みは感じていないのか、使用人は表情を変えなかったがゴキントと嫌な感触がして腕がおかしな方向に曲がる。

だがヴォルフはその手を離さない。

それどころか、使用人の身体を箒ほうきのように振り回した。

ヴォルフにまとわりつく使用人たちは木の葉のように吹き飛ばされる。草というクッションのあ

る地面に叩きつけられた者は運がいい方で、庭園の木々に吹き飛ばされた者は幹をへし折り、屋敷の壁に投げ出された者は壁に穴を開けて屋敷の中に転がった。

そんな力で叩きつけられた使用人たちは、もはやピクリとも動かない。傀儡くぐつが解けたのかは定かではないが、肉体的なダメージが行動不能な段階にまで達したのだ。

一応、呻うめき声が聞こえ、死んではいけないのがわかる。……骨の数は折れただろうが。

それを片手でやったのだから、ベルリングは目を見開いて硬直していた。ヴォルフが目を向けると、ピクリと震え上がる。

「ま、待て！ 私を殺したら鍵は——」

「気にするな。お前を説得するつもりはない」

ひと息に間合いを詰めると、ヴォルフはベルリングの顔面を軽くはいた。

「がべっ？」

ベルリングはその場で一回転すると頭から地面に倒れ込む。ピクピクと痙攣けいれんする初老の紳士は、白目を剥いて昏倒こんとうしていた。

鋼鉄の扉を蹴破り、人間を片手で振り回し、撫なでる程度に叩いただけで人が吹き飛ぶ。

明らかに人間の範疇はんちゆうを超えた腕力だった。

すぐさまベルリングの服を探るが、目的の鍵は見つからなかった。

——や、は、り、こいつは持っていないか。

揺籃の本当の使い手が誰なのは、ユッタが教えてくれた。だから、ベルリングが持っていない

こともわかつてはいたのだ。

諦めて立ち上がるうとしたときだった。

「驚きました。その力、本当に人間ですか？」

そして、背後にカチャリと金属の音が聞こえた。

振り返ると、そこには銃を構えたロイの姿があった。どうやら近くに隠れていたらしい。

「……お前だな、鍵を持っているのは」

「あれ？ 驚かないんですね」

「この仕事も初めてじゃないんでな。こういうこともある」

ユッタが教えてくれた名前は、ロイだったのだ。もっとも、彼女の名前を出すと逆恨みをされるかもしれない。だからヴォルフは曖昧にはぐらかした。

しかし、銃を突きつけられるまで気づけなかったのは迂闊うかつだった。

いまからヴォルフが拳銃を抜こうとしても、その前に撃たれるだろう。

——こいつらはそのための罠おとりか。

ロイの指は引き金にしつかりとかかかっていて、ヴォルフが少しでも動こうものなら即座に撃ってくるだろうと感じた。

少年はおかしそうに笑って、ヴォルフの腰の刀を見る。

「ソーディアンはみんなそんな化け物じみた力を持つてるんですか？ それとも、その剣もアーティファクトだったりするんですか？」

「……なにか勘違いをしているようだが、こいつはただの呪いだ。お前が思うような便利なものじゃない」

ヴォルフの身体能力は、決して対価がないような都合のよい力ではない。

——いずれ俺は自我のない獣になる。

自我を失い、親しい人間が誰かもわからなくなり、目に付く全てを斬り歩く人斬りと化す。

それがこの『吼犬』というアーティファクトの呪いだ。超人的な力は、身体が呪いに蝕まれていく証しなのだ。

それがわかつていながら、ヴォルフは『吼犬』を手放せない。

——これだけが、かたき仇への手がかりなんだ。

ヴォルフが人でなくなる前に、仇を見つけないといけない。

ロイは肩をすくめる。

「まあ、なんでもいいですよ。別にそういう力に興味はないですから」

ヴォルフは倒れて動かなくなったベルリングに目を向ける。

「自分の父親を傀儡にしたのか」

「父上は『天使の揺り籠』を処分なさるとおっしゃった。見逃すわけにはいかないでしょう？」

どうやらベルリングは息子が揺籃に魅せられたと気づいて、封印美術館を頼ったらしい。

しかしヴォルフたちが到着する前にロイに気づかれ、傀儡にされてしまったのだ。

——もう少し、手加減をしてやればよかったか？

ヴォルフが殴り倒したベルリングは、未だに目を覚ます気配がない。目を覚ましたところでしばらくは首にギブスを巻いて生活することになるだろう。頭に血が上っていたとはいえ、手荒く扱ったかもしれない。

そこでロイが眉をひそめる。

「しかし、なんであなたは天使の声に従わずにいられるんですか？ 確かに歌ったはずなんですけど」

「……なるほど。アーティファクトを回収しろと言ったのは、歌声を聴かせるためか」

確かに『セイレーンの揺籃』はそこにあっただが、近づけば助けを求めるユッタの声を聞かざるを得ない。ロイの狙いはそれだったのだ。

ロイは悪びれた様子もなく頷く。

「ええ。芝居はきちんとできたと思いますが、どうやって天使の歌声を聴かずにすんだんでしょうか。もしかして、初めからあれの力もご存じだったとか？」

「……天使なんかよりずっと面倒な幽霊に取り憑かれてるもんでな」

洪面を浮かべるヴォルフの言葉をどう受け取ったのか、ロイはおかしそうに笑う。

「はは、怖いな。あなたはいいたい、いくつのアーティファクトを持ってるんですか？」

「さあな」

ひとしきり笑うと、ロイは真顔で銃を向け直す。

「あなたに銃なんて効くのかわかりませんが、お願いします。美術館に帰って、ここにはなにもなかったと報告してもらえませんか？」

「……ずいぶんと、寛大なことを言うんだな」

「言ってるでしょう？ 他のアーティファクトなんかに興味はない。僕はただ、天使を守りたいだけなんです」

その言葉は本気でそう言っているように聞こえた。

だからこそ、ヴォルフは哀れに思う。

「なら、さっさと揺り籠を手放せ。あれはお前の天使とやらを殺す道具だぞ」

「——っ？」

ロイは目に見えて狼狽^{うろた}えた顔をする。

「……そんなでまかせで、動揺を誘えるともぞ？」

「お前、妹の魂を引きずり出して閉じ込めたんだろう？ あそこに閉じ込めてどれくらい経つ。魂のない肉体はすぐに死んでしまおうらしいぞ」

ジブリルが言うのだから間違いないのだろう。ロイが閉じ込めた天使はすでにジブリルが解放したが、ヴォルフはその事実を突きつける。

——だからこそ、こちら時間もないんだ。

いま揺籃に閉じ込められているのは、ユッタではなくジブリルなのだから。

焦りを顔に浮かべるヴォルフに、ロイはかぶりを振る。

「ユッタは天使になったんだ。もう、あんな壊れた身体は必要ないんだ。僕がユッタを守る。あなたも邪魔なんですよ！」

「そうか」

しかし別に、ヴォルフは説得を試みているわけではない。すでにこの事件は力尽くで解決させると決定しているのだ。

——銃を向けたんだ。腕の一本くらいは斬り落としても文句はないだろう。

殺しはしないし手加減もするが、最初のメイドのときほど気を遣うつもりはなかった。

ミシリと身体を軋ませ、刀を抜こうとしたときだった。

「やめて兄さま！」

聞き覚えのない、幼い少女の声が響いた。

「ユッタ……？」

ロイの後ろに、天使だった少女が現れていた。もちろん翼はなく、人の姿だ。

しかし揺籃に閉じ込められていたせいかわ、立っているのがやつとで壁にもたれかかる。

「お願い……兄さま……」

消え入るような声で訴えると、少女はわずると膝から崩れ落ちていく。

「ユッタ！」

意外なことに、ロイは銃を放り出してユッタのもとに駆け寄った。

地面に倒れ込む寸前で、その身体を受け止める。

「なんでここに？ いや、それよりどうして揺り籠から出たりしたんだ。あの中にいればお前は病気にだって苦しまなくてよかったんだぞ？」

後ろにヴォルフという敵がいるのも忘れて、ロイは叫ぶ。

「違うん、です、兄さま……。わたし、何度も、助けてって言ったのに、なのに、わたしの声、聴いたら、みんなおかしくなって……。自分」

自分がなにをしていたのかようやく気づいたのだろう。

ロイの顔が見る見る青ざめていった。

ヴォルフは刀に手をかけたまま立ち上がると、ロイに語りかける。

「鍵を渡してもらえるな？」

「し、しかし……」

「こちら仲間がやられている。俺がそう何度も穏便に話しかけられると考えないでくれ」

ロイは震え上がると、ヴォルフとユッタを交互に見つめる。

「兄さま、お願いします。あれはここにあってはいけないものです」

「……わかったよ」

観念して肩を落とすと、ロイは胸ポケットから一本の鍵を取り出す。鳥の翼を模った金色の鍵だ

った。

「でも、あなたはひとりだったんじゃない——」

ロイはなにかを言いかけるが、ヴォルフは鍵をひったくるように受け取ると真っ直ぐ地下室へと引き返す。

「鍵を回収してきたぞ、ジブリル——」

声をかけようとして、ヴォルフは言葉を失った。

髪と同じ色の翼を持った少女は、鳥籠の中で物憂げに膝を抱いて踞っていた。

いつもの軽薄な笑みとは違う、憂いに翳った表情。背中に翼を背負う姿は本物の天使のようで、思わず見惚れてしまった。

ヴォルフに気づくと、ジブリルはパッと顔を上げる。

それから非難がましく睨む顔を作ると錠前を示して柵を揺らす。

——しゃべれなくてもうるさいやつだな……。

ここまでくるともはや尊敬の念すら覚える。

ヴォルフは鍵穴に鍵を挿し込むと、時計回りに捻る。カチンと軽い音を立てて、今度こそ鳥籠の扉は開いた。

鳥籠の中の少女は溶けるように消えていき、その前に横たわるジブリルがパチリと目を開く。

「どうやら、無事に元に戻れたようだ。」

「待たせて悪かったな」

今回、ジブリルが捕らえられたのはヴォルフのせいでもある。バツが悪そうに、それでもねぎらいの言葉をかけようとしたのだが――

「いやー、やっぱり鳥籠の中なんて入るもんじゃないですね。わたし、これから綺麗な鳥を見かけても鳥籠に入れようとは思えないですよ。あ、でもでもとちも囚われのお姫さまのわたしってどうです？ ヴォルフさんも欲情しちゃったりしちゃいました？ 出る前にこう、せくしいなポーズでも取った方がよかったですかね、もう一度入ってあげましょうか？ ちよつとくらいならヴォルフさんのリクエストにも応えちゃいますよ。あまりえつちなのはダメですけど！」

いままでしゃべれなかった鬱憤うつげんを晴らすかのように、ジブリルは一気にまくし立てる。

「……はあ」

「ちよつとなんですかその呆あきれ返ったようなため息は！」

「わかっているなら少し静かにしてくれ……」

「うわ！ 身を挺ていしてヴォルフさんを守ってあげたわたしにそういうこと言っちゃうんですか？

もう少しねぎらいっぽい言葉とかかけてくれてもいいと思うんですけど！」

ジブリルは、やはりジブリルでしかなかった。

「……まあ、あの子を助けてくれたことには、感謝している」

彼女を危険に晒さなくとも、先に鍵を探すという方法もあったのだ。

だがヴォルフはここで助けると意地を張り、ジブリルはそれに応えてくれた。そのことに感謝しているのは本当だった。

ジブリルは戸惑うように宙へ視線をさまよわせ、それから本当に小さな声で呟く。

（わたしも、必ず戻ってくるって、信じてましたよ）

それまでのやかましい騒音に晒されていたヴォルフの耳は、そのかすかな声を聞き取ることができなかつた。

「……？ なにか言ったか？」

「いいえ？ なあんにも？」

そう言って笑う少女の笑顔は、本当に天使のようだった。



「ふうん。じゃあ、やっぱり犯人は天使ちゃんのお兄さんだったわけですか」

ベルリングの屋敷を出てヴォルフが事件の結末を語ると、ジブリルは興味深そうに呟いた。

回収した『セイレーンの揺籃』は、紐で固定してヴォルフが背負っている。一応、金貨は置いてきたので買い取った形になる。……もつとも、ベルリングをはじめとする屋敷の住人の治療費と修繕費とで、ほとんど残らないだろうが。

「ロイくん、一歩間違ったら変質者ですけど、あの様子じゃ本当に妹ちゃんを助けたかったんでしょうね」

あのあと、ユッタは倒れてしまった。

もともと病弱だったらしいのだが、揺籃に閉じ込められて肉体と魂が切り離されていたのだ。それで一気に容体が悪化したのだ。

そのときのロイの取り乱しようは大変なものだった。妹が死んでしまうと、泣いて狼狽うろたえていた。ヴォルフはちらりと屋敷を振り返る。

「あの娘、助かると思うか？」

「さあ、どうでしょうね？ こればかりは運次第ですよ」

ヴォルフたちの役目はアーティファクトの回収だ。

そしてヴォルフにとって重要なのは、そこで死者を出さないことだ。

誰も彼もを救うような力はないし、ヴォルフ自身もそのようには行動していない。操られているだけと知っていないながら、骨が折れるような力で殴り倒しているのだから。

——それでも、助かってほしいとは思っている。

ジブリルはなんでもなさそうに笑う。

「今回は回収が早かったおかげでびつくりするくらい被害が少なかったんです。せいぜい、屋敷の住人がほとんど全員病院送りになったくらいですか？　なんであんな怪我人出ちゃったんですかね？」

「……悪かったな」

「あは、冗談ですよ。アーティファクトがらみで手加減なんてしたら、こっちの方が死んじゃいますから」

大したことはないと笑って、それから珍しく真面目な表情を浮かべる。

「ところでヴォルフさん、ロイクンが言ってたこと、どう思います？」

去り際に、事件の犯人であるロイはあることを告白したのだ。

——この鳥籠を使えば、妹を病気とは無縁の天使の身体にしてやれるって言われたんです——

彼にアーティファクトの力と使い方を教えた誰かがいる。その言葉に惑わされて、ロイはあんな凶行に走ったのだ。

「……名前は、クロウリーと聞いたか？」

ロイの話では顔どころか歳も性別もわからない——いや、正しくは思い出せないと言う。

「……俺たち以外にも、アーティファクトを集めている人間がいるのか？」

「だとしたら、ちょっと怖いですね……」

肩を抱いて身震いをするジブリルは、演技のようには見えなかった。

——そいつが、ミルカの仇なのか？

ヴォルフが生涯をかけてでも殺すべき敵だ。

憎しみを隠すように、ヴォルフは頭を振る。

「そいつがアーティファクトに関わっているなら、いずれ巡り会うだろう」

「ま、確かにいま気にしても仕方ないですよね」

そうして、屋敷から離れようとしたときだった。二階の窓が開いて、少女の声が響いた。

「あの、待ってください！」

ユッタだった。その肩を支えるようにロイが寄り添っている。見れば別れ際の容体が嘘うそのように顔色がよくなっていた。

「……ジブリル、お前、なにかしたのか？」

「誰にも見えないし、ものにも触れないわたしにができるっていうんですか？」

「ものに触れなくても魔力は操れるんだらう？」

ジブリルは白々しく視線を泳がせる。

「揺籃をこじ開けるのには神経を使いましたからねえ。もしかしたら魔力の流れがおかしいところを結び直しちゃったかもしれないですし、それでどんな副作用が起こったかなんて、わたしには想像もつかないですよお？」

どうやらユッタの病の原因になる部分に、なにか手を加えたらしい。

しかしこの少女がわざわざそこまでしたということは……。

「そんなに危ない状態だったのか」

「……ま、ヴォルフさんが急^せかさなかつたら手遅れになってた可能性は否めませんね」

あのととき意地を張るヴォルフにつき合ってくれたのは、それだけユッタが危険な状態にあったという理由もあるようだ。

そんなことを囁き合っていると、ユッタが声を上げる。

「ありがとうございます、ヴォルフさんも、天使のお姉さんも！」

そのひと言に、ヴォルフは目を見開いた。

「……おい、あの子、お前のことが見えてるのか？」

「さ、さあ……」

これはジブリルも予期せぬことだったらしく、ジブリルも声に動揺を滲ませていた。あるいは、アーティファクトに触れた副作用かもしれない。

——もしくは、本当に天使の贈り物、か。

命の危険に晒されて生還した少女への、ささやかなご褒美^{ほうび}だったのかもしれない。そんな取り留めもないことを考え、ヴォルフは頭を振った。

ふたりはぎこちなく手を振り返して屋敷をあとにする。

それからジブリルが、どうだと言わんばかりに笑みを浮かべてきた。

「天使のお姉さんですって。ヴォルフさんも、たまには素直にわたしのこと褒めてもいいんですよ？」

「黙って鳥籠に入ってくれれば天使だったかもな」

「いま言外にうるさいって言いましたよね？」

「わかってるなら少しは黙れ」

ジブリルはまたなにか喚き始めるが、ヴォルフは黙殺した。

——天使、か……。

鳥籠の中で、ひとり震えながら踞っていたジブリル。

ヴォルフはあれがこのやかましい少女の素顔であることを知っている。

それを隠すために、こんな奇天烈な言動を取っていることも。

だからそれをさらけ出させてしまったのは、ヴォルフの失態だった。

それから、ジブリルが揺籃に閉じ込められた原因を思い出す。

「ところでお前、なんであのとき俺が言った糸と逆の方を切ったんだ？」

「えー？　だってヴォルフさん、失敗したら自分を恨めとか言うから……」

「そののなが気に入らないんだ？」

「ヴォルフさん、それで失敗したら死ぬまで抱え込むじゃないですか」

まったくの凶星で、ヴォルフは硬直した。

「わたしにはわたしの優先順位がありますから、それに従って行動しただけですよ」

「……まさかとは思いますが、俺が責任を感じると思ってたからか？」

「さあ……？ あ、でもわたしは気の利く女ですからやっぱりその通りなんですよ！」

「すまん。気のせいだった」

言い合うふたりの行く先に、陽射しもないのに陽炎かげろうが立っていた。

陽炎からは次第に明確な形が現れていき、蜃気楼しんきろうのように大きな影を落とす。

やがて、数秒前までなにもなかったはずのそこには大きな門が現れていた。

ギイイと音を軋しませ、門はひとりでに開いていく。

そこには、幼い姿の少女が待ち構えていた。足元には、それに付き従うように黒猫が丸くなっている。

「ナベリウス封印美術館へ、ようこそ」

そう言って、不思議な色の髪の少女は腰を折る。

ヴォルフとジブリルは顔を見合わせ、こう答えた。

「ただいま」

ふたりが中に足を踏み入れると、門は再びひとりでに閉じていく。
それもまた陽炎のように消えていき、あとには全てが幻だったようになにも残らなかった。

「ナベリウス封印美術館の蒐集土」コレクタ1 試読版第三弾は「こ」まで。「天使の揺り籠」編は完結となります。続きは本編でお楽しみください。2017年1月15日頃の発売です！